

**目的** 第1報に続いて、その内容について述べる。

**方法** 主に「家相秘伝集」上・下 松浦琴鶴著 天保11年(1841)刊を中心にして、方位の基準となる中央の定め方をはじめ、江戸時代家相で最もよく考えられていた門戸、井戸、かまど、かわや等の水回りについて詳述する。

**結果** 「家相秘伝集」の序文に曰く、“それ陰陽清濁は天地自然の表裏上下尊卑の起源なり、(中略)これ物に貴賤の別ある所以なり、而して各々其分を守て争ざるものは偏にじん、道義を重ずるによる是を以その居所に於も亦宮殿樓閣坊舎亭おのおの分に依じて其制異なり。”とあり、そのことについて“夫子と禮はその蒼らんよりむしろ儉ぜよと曰り、四民其職業に随い分限を辨へ花美を除き専ら質素を守ことすべて長久の基ふして是亦宅舎吉相をしくの要道たり。”との文章でもわかるように、分限相応で欲におぼれることない生活を営むこととの教えが述べられている。また、“既に地宅兩吉相をしくといへども主人亦正しからざるときは、えきなきに近く(中略)其地宅吉なれば必ず善をこのみ地宅凶なれば極て悪を好、吉凶の然しむる所なり、ただ主人正しといへども、地宅凶なれば其利起らず、地宅とじん気の兩吉互に依ってさいわいをまねくなり。”と述べられている。「家相」は、もとは天文地理よりつくられたものであるのだが、人の生活を幸せにするための家づくりのひとつの方法を記した指導書でもあり、また、人の生き方を教えるひとつの教科書的な役割も果たしていたと思われる。